京ものがたり

川端康成が描いた北山杉

失われゆく「古都」 憂いを込めて

川端康成　1899年、大阪市生まれ。父母が早くに亡くなり、祖父母に引き取られ育つ。東大国文科を卒業し、横光利一らと「文芸時代」を創刊。新感覚派の代表作家として活躍した。1968年にノーベル文学賞を受賞し、72年死去。主な著書に「伊豆の踊子」「雪国」「山の音」など。

まっすぐ空に向かって立ち並ぶ北山杉＝京都市北区、滝沢美穂子撮影

生き別れになっていた双子の姉妹、千恵子と苗子。祇園祭の夜に再会し、心通わせながら、一緒に暮らすことができない――。

1961年10月から翌年1月まで朝日新聞で連載された川端康成の小説「古都」。育った環境の違いから交わりがたい姉妹の運命が、平安神宮の桜、祇園祭、大文字、時代祭など四季の風物とともに描かれる。

川端康成記念会理事長の川端香男里(81)は「京都という都市が主人公の小説」と話す。

とりわけ何度も登場するのが、京都市北部で育てられている北山杉と北山杉の里・中川（京都市北区中川北山町）だ。

市中心部の呉服問屋で育つ千恵子は「北山杉のまっすぐに、きれいに立ってるのをながめると、うちは心が、すうっとする」と、しばしば通う。

◆

祇園祭で再会した千恵子と苗子が語り合うのも杉林のなか。突然の雷雨に苗子は千恵子の上に覆いかぶさる。言うに言えぬ、親しいあたたかさが、千恵子の体にしみわたる。

北山杉は枝打ちを何度も繰り返す。節がなくまっすぐで年輪が詰まっているのが特徴だ。伐採された木は皮を取って磨き上げられ、白く光沢がある。主に茶室や数寄屋建築の床柱に使われ、京都の文化を支えてきた。「室町時代からの歴史があり、木造建築の最高峰を守ってきた」と中川に暮らす林業家の岩井吉彌(69)。

◆

杉林の姿は、一様ではない。山に入ると、木の先端近くまで枝打ちされ、太さのそろった杉が、整然と空に向かって伸びている。一方で、台杉と呼ばれる、独特の形の杉も。ごつごつした太い台座状の部分から細身の幹が数本すらりと伸びている。いずれも高級建材となる。

どちらの形の杉を見たのか、康成はこう描いている。「じつに真直ぐにそろって立った杉で、人の心ごめた手入れが、一目でわかる」

神奈川県鎌倉市の康成の自宅には樹齢400年という北山杉の台杉が植えられており、格別の愛着をうかがわせる。

北山杉を育ててきた京都市の林業家森下良介(76)は、康成の自宅まで何度も手入れに通った。康成が北山杉の取材をした時、森下の父が案内したのが縁だ。杉林で康成はよく話し、よく笑った。

近代文学研究者の平山三男(67)によると、康成には京都の変化を惜しむ思いがあったという。「私たちが若いころの京都は目に浮かべられてゆくのではないかとうれへる」（「古都」を書き終へて）と康成は記す。

「何代にもわたって受け継がれてきた北山杉に、川端さんは失われゆく古都の姿を重ねたのではないか」。森下はそう思っている。

＝敬称略（前田智）

細い柱を育む台杉

おこしやす

中川地域（京都市北区）は、JR京都駅から周山行きのバスで約1時間。渓流沿いにある集落を歩くと、ところどころに磨き上げられた丸太が並べられているのを目にすることができる。床柱がある住宅が減ったことなどで北山杉の需要が減り、荒れた山が増えている。危機感を持った住民は昨秋、北山杉の良さを知ってもらおうとガイドツアーを開催。今年も4、5月に催す。問い合わせは北区役所中川出張所（075・406・2340）へ。

ふれぜんと

川端康成の文と東山魁夷の絵で京都を案内する本「今、ふたたびの京都」を5人に。はがきに住所・氏名・年齢・電話番号を記し、〒530・8062 大阪北郵便局私書箱526号「川端康成」係へ。16日必着。